

内村鑑三著「後世への最大遺物、デンマルク国の話」ワイド版岩波文庫 36、岩波書店 1991年6月26日刊を読む

「後世への最大遺物」

われわれが五十年の生命を托したこの美しい地球、この美しい国、このわれわれを育ててくれた山や河、われわれはこれに何も遺さず^{のこ}に死んでしまいたくない、何かこの世に記念物を遺して逝^ゆきたい、それならばわれわれは何をこの世に遺して逝こうか、「金」か、「事業」か、「思想」か、これいずれも遺すに価値あるものである、しかしこれは何人にも遺すことのできるものではない、またこれは本当の最大の遺物ではない、それならば何人にも遺すことのできる本当の最大遺物は何であるか、それは「勇ましい高尚なる生涯」である、

P121 ~ 122

「デンマルク国の話」

国を興^{おこ}さんと欲せば樹を植えよ、植林これ建国である。山林は木材を供し、気候を緩和し、洪水を防止し、田野を肥し、百利ありて一害なし。謂う、もし日本の山野を掩^{おも}うに森林をもつてすれば、これより生ずる利益に由^よりて、民より租税を徴することなくしてその政府を維持するを得べし、と。今や日本はその親友たりし米国よりすら排斥せられて外に発展するの途は当分絶えたりというも差支^{さしつかえ}なし。この時にあたって内を開発して新たに領土を増すの必要がある。そしてその方法としてもっとも容易なるは国内いたるところに存^{はげやま}する禿山に植うるに樹をもつてすることである。小なるデンマーク国はプロシヤと戦いて敗れ、その領土の半^{なかば}を奪われしも、国内の荒地に植林して失いし以上の富を得た。臥薪嘗胆はかくのごとく^{がしんしょうたん}に実現すべきである。この上不義不信を憤るも益はない。憤慨を有利的に現わさんがために私は挙国一致の植林を提言する。文部省はよろしく植林日^{アーボル デー} (Arbor Day) を定め、一年に一日、全国の小学校生徒をして、一人一本ずつの苗木を植えしむべし。これは上杉鷹山公^{うえすぎやうざん}が米沢の瘦地^{やせち}を化して東北第一の沃土^{よくど}となした方法である。われらは日本全国を緑滴^{したた}る楽園^{パラダイス}に化して全世界の排斥に應ずる事ができる。製造業商業励むべしといえども忘るべからざるは農の国本たることである。そして農の本元は森林である。山に樹が茂りて国は栄ゆるのである。

P124 ~ 125

<コメント>

現代の古典、内村鑑三著「後世への最大遺物 デンマルク国の話」は、いかに生くべきかを考える際、また、先生として教える際のテキストとして最適と考えます。同著「代表的日本人」や、中国の古典「四書(論語、大学、中庸、孟子)」とともにぜひお読みください。

2023年3月23日(木)林明夫